

## 秦王李世民（唐太宗）と長安勝光寺

——唐太宗の崇仏事情の一面——

伊 藤 誠 浩

はじめに

貞觀十一年（六三七）二月に唐太宗（李世民、在位六二六～六四九）が下した「令道士在僧前詔」<sup>1</sup>は、唐初に繰り広げられた道仏論争に対して、唐高祖（李淵、在位六一八～六二六）が打ち出した仏敎に対する道教の上位を再確認するものであった。而して、武周期を例外として、唐王朝における道教の上位は動かざるものとなつたようである。然らば、先ず以て、かかる太宗の即位以前の崇仏事情は如何なるものであつたであろうか。諸史料を繙くと、長安勝光寺の存在が浮かび上がつて来る。

小論では、秦王時代即ち武徳年間（六一八～六二六）における李世民的崇仏事情の一端を勝光寺との関わりの中から窺つてみたい。

一、武徳年間における勝光寺について

唐初、長安の光徳坊に存した勝光寺は、開皇十年（五九〇）、隋文帝（楊堅、在位五八一～六〇四）が第四子、蜀王楊秀（五四二～六一〇）の為に、豊樂坊に建立した仏寺を移転したものである。この勝光寺の沿革については、既に小野勝年博士の『中国隋唐長安・寺院史料集成』解説篇、開業寺並びに勝光寺の条（法藏館、一九八九年、一一八頁～一九九頁、一四三頁～一四六頁）が存する。勝光寺の沿革は、およそ小野博士の記述に拠るべきであり、筆者もこれに賛同する。唯、武徳年間の記述において、秦王時代の李世民との密接な関わりをふれられておられないことは、遺憾に思われる。

武徳年間における勝光寺の記載は、唐王朝の中国統一の大勢がほぼ決した武徳四年（六二二）五月の洛陽（鄭国王世充政權）平定後にみられる。それは、秦王李世民による洛陽の三大法師の勝光寺への招聘としてみえるのである。三大法師とは、煬帝朝の仏敎隆盛を象徴する仏寺、東都内慧日道場に住して洛陽仏敎界を指導していたとみられる高僧、即ち慧乘

(五五五〜六三〇)、道宗(五六三〜六二三)、弁相(？〜六二七)を指す。この招聘の経緯について、慧乗を例に挙げてみてみよう。『統高僧伝』巻二十四、慧乗伝では、以下のよう  
にみえる。

武徳四年掃定東夏。有勅偽亂地僧是非難識。州別一寺留三十僧。餘者從俗。上以洛陽大集名望者多。奏請二百許僧住同華寺。乘等五人勅住京室。于時乘從偽鄭詞被牽連。主上素承風聞。偏所顧屬。特蒙慰撫命住勝光(丁五〇・六三三)。

ここにみえる平定後の洛陽仏教界への淘汰についての子細は割愛するが、その折、選抜された慧乗ら五名の高僧は高祖の詔勅によつて長安へ赴いたとみえる。ここにいう五名の高僧とは、三大法師と法護が該当するとみられ、他の一名は詳びらかでない。<sup>(2)</sup> 彼らが長安へ到着するのは、恐らく、秦王李世民の凱旋する七月である。<sup>(3)</sup> 時に慧乗は、鄭国王世充政権(六一九〜六二二)に従い、連坐に該当していた。しかし、慧乗は秦王李世民に厚遇され、その教命によつて勝光寺に住することになったという。

このように、勝光寺は、洛陽仏教界を指導した三大法師が秦王李世民的招聘によつて帰着した仏寺であった。

更に前掲の慧乗伝は「秦國功德咸歸此寺」(丁五〇・六三四a)と所住選定の理由を記載する。これによつて、唐王朝創業後、比較的早い時期に、秦王李世民は勝光寺に厚く帰依す

秦王李世民(唐太宗)と長安勝光寺(伊藤)

るに至つていたことが知られる。  
然れば、秦王李世民的仏教政策の中心となる仏寺は、勝光寺であつたと想定される。

## 二、秦王李世民的崇仏事情

その後、秦王時代の李世民は、三大法師などを招き、所住の弘義宮にて夜通し法集を催すなど、崇仏帰依を示している。然るに、目下、秦王時代の李世民的仏教政策における勝光寺の役割については、今ひとつ明らかにし得ないものがある。そこで李世民の崇仏の一端を示す勝光寺へ招致した高僧の数に注目したい。以下、試みに『統高僧伝』によつてそれを窺い、隋煬帝(楊広、在位六〇四〜六一八)の江都慧日道場などへの招致高僧数と比較して、秦王李世民的崇仏のほどを窺つてみたい。

煬帝を比較の対象に選んだ理由は、煬帝が崇仏皇帝とみられ、しかも李世民と同時代人にして即位するまでの経緯が甚だ近似するからである。そして何よりも、前述のように、勝光寺が秦王李世民的仏教政策の中心となる仏寺と想定されることから、既に山崎宏博士の高論、「晋王広(煬帝)の四道場」(『隋唐仏教史の研究』、法藏館、一九六七年)によつて明らかにされた晋王時代における煬帝の仏教政策の中心的な仏寺、江都慧日道場との対比が可能ではないかと考えたからである。

ところで、史料の制約上、各々招致された高僧の数を全て網羅したものではないことを断つておかねばならない。唯、残された同時代の好史料として『統高僧伝』の記載を抛り所とし、各仏寺へ招致された高僧の状況の一端を窺ってみることは許されるであろう。

洛陽、及び河南地域に限定せず、秦王李世民が長安勝光寺に招致した高僧は上記の三大法師が知られるのみである。一方、山崎博士によれば、晋王時代の煬帝によって、江都四道場の中核、慧日道場に招致された高僧は、凡そ十三名の名が伝わるとされる（山崎前掲書、九〇頁〜九二頁）。然れば、秦王李世民的招致高僧数は、煬帝の江都慧日道場の約二三％に過ぎないこととなる。同時代に生きた『統高僧伝』の撰者である南山宗の祖、道宣（五九六〜六六七）の目には、秦王時代における李世民の崇仏のほどは、即位以前の煬帝のそれに及ばないものとして映っていたとみられる。

このことは、秦王時代における李世民の崇仏のほどを象徴的に表していると言えまいか。

## むすび

かくて、長安勝光寺は、秦王李世民が仏教政策を進める上で中心仏寺としたもの、と想定される。かかる意味において、勝光寺の歴史的な位置は理解されるべきであろう。

目下、秦王李世民的仏教政策における勝光寺の役割は今ひとつ明らかではない。しかし、その崇仏の一端を示す勝光寺への招致高僧数によれば、秦王李世民的帰依は崇仏皇帝とみられる煬帝のそれに及ばないものとみられる。このことは、秦王時代の李世民的崇仏事情、ひいては即位後の崇仏事情を窺う上で、看過し得ざる事柄であるとみられる。

1 『唐大詔令集』卷一百十三、『全唐文』卷六、『広弘明集』卷二十五にみえる。

2 『集古今仏道論衡』卷丙、『統高僧伝』卷十一道宗伝、卷十二弁相伝、卷十三法護伝にみえる。

3 『資治通鑑』卷一百八十九による。両唐書の太宗本紀にみえる「六月」は洛陽出發年次であろう。

4 『統高僧伝』卷十一道宗伝、卷十二弁相伝、卷二十四智実伝にみえる。

5 参考までに、山崎博士は、皇太子時代の煬帝が長安日嚴寺に招致した高僧について、十六名の名を記載され、即位後の東都内四道場の中核、慧日道場に招致した高僧について、十八名の名を挙げられている（山崎前掲書、一〇一頁、一〇六頁）。

〈キーワード〉 李世民、勝光寺、三大法師

（愛知学院大学院院研究生）